

人力だけで
 家の前の谷地を造成

文・小西 一三
 絵・小西 由紀子

「家」の建っているこの場所は以前は潟だった。ここは自分たちで潟から砂を少しずつ運んできて埋め立てて造った土地だ。こう語ってくれたのは羽立の鈴木為春さん。半農半漁の仕事のかたわら、家族で埋め立てに汗を流したという鈴木さんにお聞きしました。

船で潟の砂を運んで埋め立てたんだ

俺は昭和八年生まれ。俺が子どもの頃はこの一帯は隣りの家も見えないほどの葦原だった。船を繋ぐ場所だけは葦を刈っていたども「葦谷地」って呼ばれていた。ほとんどの漁師の家は潟の際にあつたもんだがら、春に潟の水が溶ける頃になると水が風で流されてきて、家のすぐそばまで押し寄せてきたもんだ。

家の前の埋め立てを始めたのは、船着き場を整備するためだったと思ふな。親父たちが始めて、しっかりした船着き場ができると、その船着き場をさらに潟の奥へ奥へと押し去っていった。当時、羽立で潟の際にあつた家は、ほとんどがこうして埋め立てをしたもんだ。始めた頃は無許可だったようだけど、その後正式に役所から許可してもらつたな。

羽立一帯は遠浅で底は砂地。この砂を埋め立てに使つたんだ。漁や田んぼ仕事のあい間に、少しでも時間ができると船を出して砂を積んでくる。船を押しして五十メートルも進めばいい砂がある。スコップで砂をす

くって船に積み、また船を押しして帰って来てはスコップで砂を下す。全て人力よ。砂を積み過ぎれば、現場の手前で船の底がついてしまうので、積む量もその都度加減したもんだ。

俺は男だけの四人兄弟だけど、子どもの頃から全員でよく手伝つた。今のような便利な資材などまったくなし。現場では杭を打って砂が流さないようにするだけ。砂を盛り上げると、そのうち砂の重さで地面が硬くなってくる。埋め立て作業は多い時で午前中に二回、午後にも二回。これだけやれば、もうくたくただった。結局、今の家の前の道路まで十年ほどかけて埋め立てた。今思えば、家族全員よく頑張つたと思ふな。

鈴木為春さん

